

広島別院だより

Vol.39
冬号

真宗大谷派（東本願寺）
広島別院教化委員会 発行

報恩講勤まる

十二月七日・八日に報恩講が勤まりました。七日は北広島町順覚寺の淀淵一思師（安芸北組）が、八日は銀山町徳栄寺の灘尾寛師（安芸南組）が講師を務めました。

以下、七日の法話抄録です。

●報恩に報い、恩を知らされる

報恩講の「報」とは親鸞聖人の御恩に報いるということであるが、具体的には私が念仏申す身になるということである。聖人は『尊号真像銘文』の中で、念仏申すということは私を救う阿彌陀仏を讃えることであり、更に我が身を懺悔することであると示された。また「報」には報知・報道など「広く知らせる」という意味がある。念仏申すことで仏恩が知らされ、自己中心的な我が身の在り方が知らされるのである。

●念仏申す後ろ姿に知らされる

高校生の頃、修学旅行で東京の浅草寺に参拝をしたことがある。本堂前の香炉から立ち上る煙を身体に当てると悪い所が治るといふ。生徒たちは皆、香炉の周りに群がっていた。その輪から離れひとり、本堂に向かって合掌する同級生がいた。その後姿がとも印象的だった。数十年後の同窓会で彼に再会し、あの時のことを尋ねると「ああ、僕は婆ちゃんがいっもお参りをしてきたから、同じ事をしたんだらうね」と言った。念仏申すということは、ただ恩に報いるというだけでなく、恩を広く知らせる報知のはたらきがある



淀淵一思 師

ることを彼の合掌する尊い後姿に知らされた。

私たちも仏様の前に身を置いて念仏申すことで仏様の御心を賜ると同時に、人々に仏様の尊さを広くお示しさせていただくことが出来たら、これほどありがたいことは無いのではないだろうか。

以下、八日の法話抄録です。

●絶対者への服従に思考停止

統一教会問題が再び騒がれている。かつてバブル経済に狂乱した時代はカルト宗教の時代でもあり、その多くはカリスマ教祖に絶対的服従をするものであった。答え無き人生の難問に即座に答える教祖への服従は、迷いもなくなるが、自ら問うことも無くなる。



灘尾 寛 師

「親鸞は弟子一人ももたず」とカリスマを絶対視するのを最も嫌ったのが親鸞聖人である。聖人は念仏の大道を浄土に向かって迷いなく歩んだ人ではない。また俺に黙ってついて来いとも言わない。むしろ人生に迷い苦しみながらも、如来の呼び声である念仏に呼び返され、浄土への道を歩まれたのではないか。

●信心と現実の狭間で

聖人四十二歳の時、大旱魃に民衆は苦しんでいた。聖人は佐貫の地で浄土三部経千回読誦に挑まれた。雨乞の祈禱を頼まれたのであろうか。結果的に「念仏の他に何の不足があるのか」と猛省し中止するのだが、その間どのような心境であったか。「これは真の信心ではない」あるいは「現実の苦悩に対し見て見ぬふりは出来ない」と信心と現実の狭間でもがき苦しまれたのではないか。しかしその苦悩する聖人にこそ宗祖

として仰ぐべき姿があるのではないだろうか。

●本当に帰依すべきもの

私たちは親鸞聖人の後ろを歩くのではなく、聖人の指し示された念仏の大道にこそ帰依し、如来からの呼び声に耳を傾けながら自ら歩むべきなのである。それこそが聖人から賜った御恩に報いていくことになるのではないだろうか。

山陽教区全門徒大会

十二月七日、報恩講に先立ち山陽教区教区全門徒大会が開催されました。

藤田博久氏（安芸南組円光寺門徒）と西田幸子氏（安芸北組妙蓮寺門徒）の感話に続き、江田島市明慶寺の長坂壽一師（安芸南組）が法話をされました。

長坂師は「親鸞聖人は九才で出家し二十九才で比叡山を下りた。それはある意味、比叡山からも出家し、里に下ったのである。浄土真宗の寺が山ではなく里にあるのは里に生きる我々にこそ仏法が必要だからである」と三宝に帰依することの大切さを話されました。

安芸南組坊守会による清掃奉仕

十一月十一日、報恩講に向けて安芸南組坊守会が別院の清掃奉仕をしました。一年間の汚れを落とし、無事報恩講を勤めることが出来ました。厚く御礼申し上げます。



親鸞聖人の生涯を辿る

法然(ほうねん)

親鸞が生涯師として仰いだのが法然です。智恵第一の法然房と称され自身は戒律を守り、厳しい求道が続けた高僧でありながら、比叡山を下り民衆にすべての人が救われる専修念仏の教えを説いていきました。その教えは老若男女貧富の差を問わず、天皇や貴族武士といった上流階層から盗賊や遊女といった身分まで、あらゆる人々に分け隔てなく救いの手を差し伸べていました。法然の教えと人柄に傾倒した人は多く、例えば法然に帰依したことで有名な九条兼実は、出迎える法然から後光がさしているのが見え、ひれ伏したという伝説があります。

親鸞にとつて法然との出会いは衝撃的でした。今までの価値観が打ち砕かれ、自分が救われる道はここしかないと感じました。

それは、一心に念仏すれば阿彌陀仏の誓願により救われるという教えに出会い、その教えを深く信じ念仏し法を説く法然の姿に触れ、その教えを聞き様々な背景を持つ人々が念仏する姿を見て、この人についていきたい、ついでいかなければならないという思いで、親鸞の新たな仏道が始まったのでした。

法座・講座等のお知らせ

2月13日(月)真宗の仏事入門講座

【講師】 近松 誉 先生 (東本願寺本廟部部長)

【日程】 毎回 13:30~16:00 【会費】 500円

〈浄土真宗の仏事について学ぶ講座です。ぜひご参加ください。〉



3月22日(水)春彼岸会

【講師】 長坂 壽一 先生 (江田島市 明慶寺 住職)

【日程】 14:00~勤行と法話 16:30 終了予定

<彼岸とはさとの世界。昼と夜の時間が等しくなるお彼岸の時節にかたよりのない仏様の教えを聞く聞法会です。>

注)法要期日が緊急事態宣言下になりましたら、内勤めといたします。参詣はご遠慮ください。



毎月5日 定例法話 (ご今日の集い)

【講師】 県内僧侶(月替わり) 【日程】 14:00~勤行と法話(15:00 終了予定)

〈広島別院開基 教如上人の御命日(毎月5日)に法話会があります。〉

講座・法要・定例法話にお参りの際は、マスク等してコロナウイルス感染拡大防止にご協力ください。

道場樹

【編集室より】

五色に彩られた仏旗は世界の仏教国共通のシンボルである。

先日、自坊の報恩講を勤めていた時、本堂入口に興味津々で中を覗く外国人がいた。招き入るとスリランカから来た観光客だった。聞けば門に掲げていた仏旗を見て来たらしい。彼は私も同じ仏教徒なのだ笑顔で嬉しそうに話していた。

以前にも同じ様なことが。確かコロナ禍のお盆の夜だったか、突然三人の若い外国人が仏旗を見て訪ねて来た。日本に働きに来た技能実習生らしい。同様に目を輝かせて私も仏教徒なんだ!と熱く語っていた。

昔、アメリカを旅した時、サンフランシスコで禅宗寺院を見つけた。宗派は違えども何とも言えない安心感を覚えたことがある。旅の終盤で疲労や孤独を感じていたせいか、仏教寺院がそこにあるというだけで心安らいた記憶がある。

いつも何気なく掲げる仏旗だが、海外の仏教国からきた人々にとつて遠い異国の地で見ると旗はどのように映るのだろうか。(H・N)

